

みほとけに花一輪
古代の萱田・村上に暮らした人々



2024.7.21 八千代市郷土歴史研究会講演会 藤由美

第I部 村上・萱田に暮らした人々

八千代市村上と萱田の空中写真（1984年 国土交通省）



第I部 1 村上の古代の集落の姿 歴博の展示から

村上込の内遺跡の古代のムラの復元ジオラマ



村上込の内遺跡の古代のムラの姿



道を行く人と馬



←台地の北西端の
瓦塔を拜む人



瓦塔(谷津遺跡)

↓村上込の内遺
跡出土の瓦塔



村上・萱田・上谷に暮らした人々が遺したモノ(歴博の展示から)

古代の集落

集落は、人びとが日常生活の場であり、住居を中心にさまざまな生産や消費活動がおこなわれた。集落遺跡からは、食器や調理具、装身具、生産用具などが見つかり、集落の生活の様子を知ることができる。

村落の信仰

古代の集落遺跡では、仏堂と思われる遺構がしばしば確認される。伽藍を持たない簡素な建物で、周辺からは仏教にかかわる遺物が出土する。仏教は古代の村落にまで浸透し、人びとの信仰のよりどころとして仏堂が営まれた。



八千代市白輪前遺跡の仏堂



粉河寺

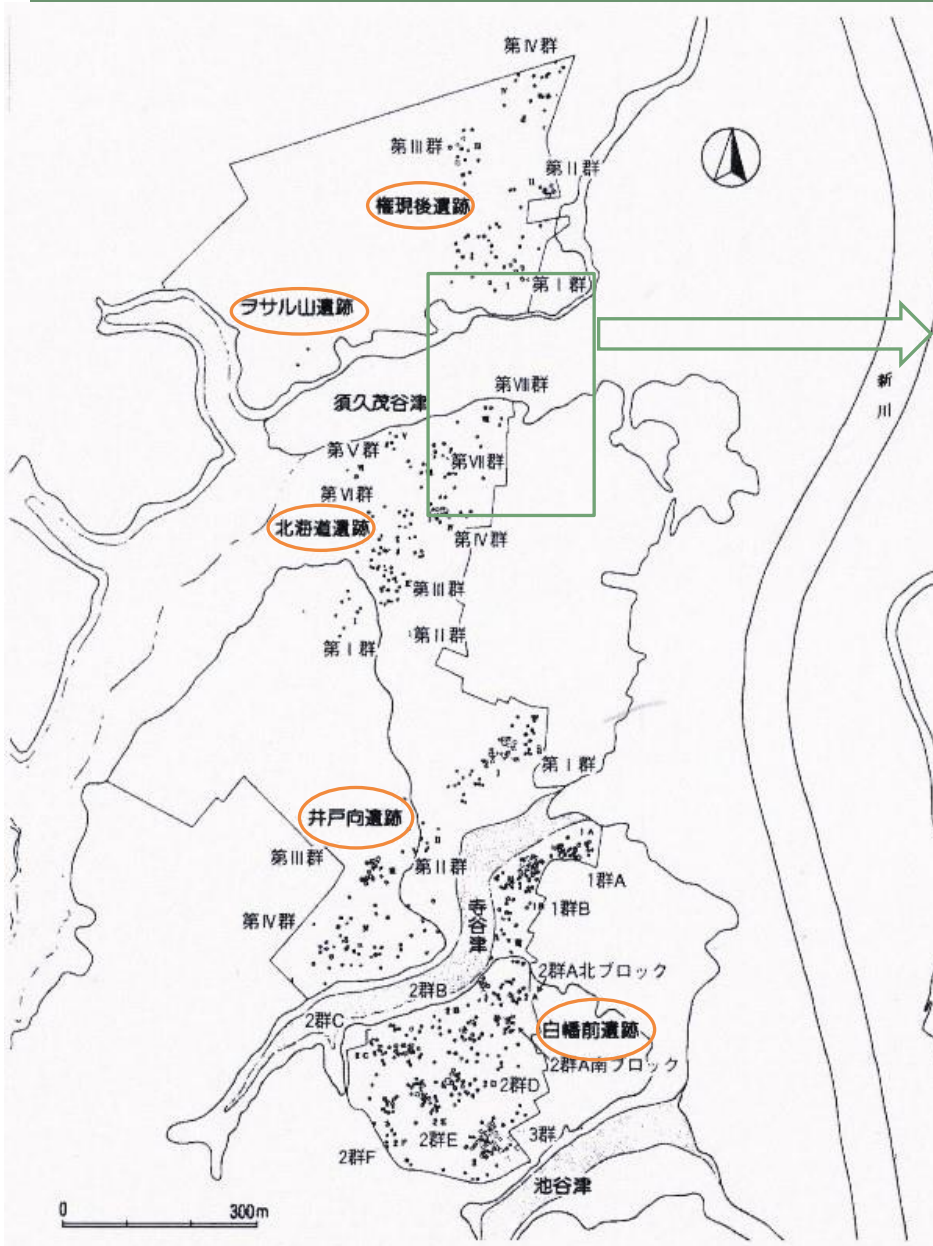


瓦塔・瓦堂 千栗原台津遺跡

瓦部 碓氷
 碓氷は、古くから用いられた土質の粗い瓦で、屋根の葺き替えの際に用いられる。この瓦は、古くから用いられており、その形状や大きさから、その用途が推定される。また、この瓦は、古くから用いられており、その形状や大きさから、その用途が推定される。



第I部 2 萱田の古代の集落の姿 八千代市立郷土博物館の展示から



萱田遺跡群の遺跡と単位集団の配置

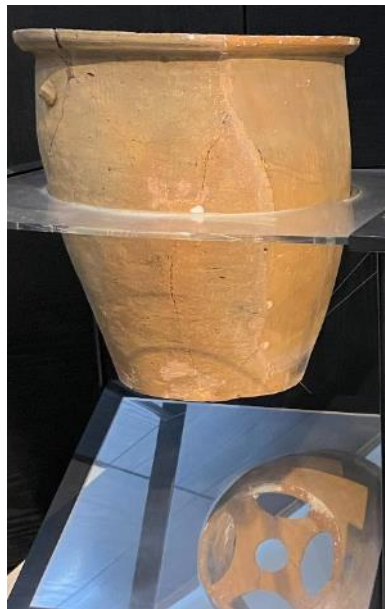
第I部 3 萱田・村上に暮らした人々の生活用品



↑ 鉄製の鋏先・糸紡ぎの道具(紡錘車)



↑ 土師器の食器など (歴博展示から)



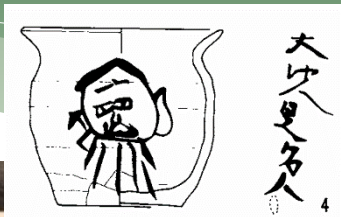
← 甗

↓ 石帯(古代のベルト 鉸具と鉞尾は金属製 円鞆と巡方は貴石製 (市博展示から)

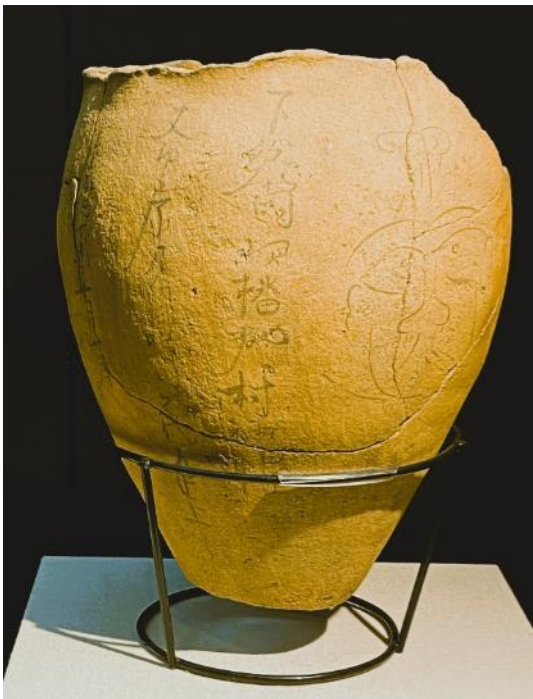
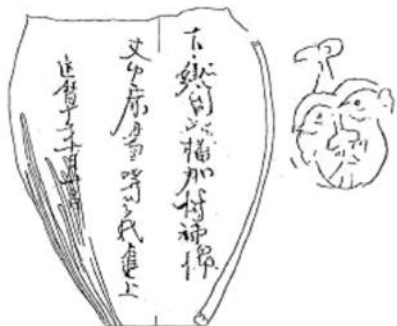


第I部 4 萱田・上谷遺跡の墨書土器

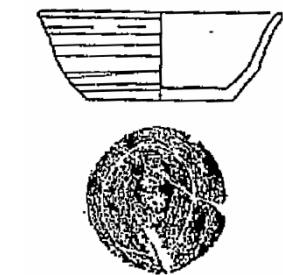
↓ 白幡前遺跡
 (「丈部人足召■」)



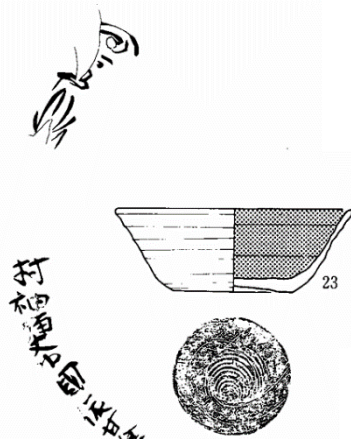
延暦十年十月廿二日
 丈部國刀自咩召代進上
 下總國印播郡村神郷



↑ 上谷遺跡出土の甕



↑ 北海道遺跡
 (「丈部乙刀自女形代」)



← 権現後遺跡
 (「村神郷丈部國依甘魚」)

第I部-5 萱田・村上の古代の信仰のあかし 八千代市立郷土博物館の展示から



銅製宝冠如来像
井戸向遺跡



三彩陶器小壺
白幡前遺跡



長頸瓶
村上込の内遺跡↔北海道遺跡



瓦塔
白幡前遺跡



第Ⅰ部 「萱田・村上に暮らした人々」のまとめ

- 村上と萱田の台地には、8世紀前半(奈良時代)から9世紀後半(平安時代)までの人々が生活する集落があり、「丈部」姓をもち、「印旛郡村神郷」に帰属していた。
- 新川に流れ込む谷津には水田、台地上には畑が造られ、馬を飼い、鉄の農具を使って耕作していた。
- 竈を備えた竪穴住居に住み、甑を使って調理し、土師器の甕や皿を使っていた。
- 紡錘車を使い、布を織るための糸を紡いでいた。
- 掘立建物や多量の墨書土器、官人が身に着ける石帯などから、文字を識る人がいた。
- 手づくね土器や、人面墨書土器、神に捧げる墨書のある土器などから、伝統的な神祭りが行われていた。
- 瓦塔、小仏像、仏鉢、「佛」や「寺」銘の墨書土器、須恵器壺、燈明具などの仏教関連遺物、また四面庇掘立建物の仏堂跡などが出土していることから、仏教が民衆に浸透していたことがわかる。

第Ⅱ部 長頸瓶(壺G)とは



村上込の内遺跡







北海道遺跡

八千代市内遺跡の「壺G」

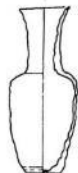



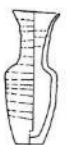




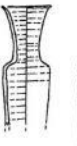
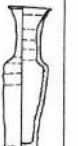
資料 1

壺G太型の型式変化

山中章『桓武朝の新流通構造』より

年代 型式	平城宮Ⅱ期 730年前後	平城宮Ⅴ期 770年前後	長岡京期 (784~794年)
	第Ⅰ型式	第Ⅱ型式	第Ⅲ型式
太 型	 〈平城京〉	 〈平城京〉  〈平城京〉	 〈長岡京〉

壺G中太型・細型の型式変化

年代 型式	平城宮Ⅴ期 770年前後	長岡京期 (784~794年)	平安京前期 810年前後	
	第Ⅰ型式		第Ⅱ型式	
中 太 型	a類 (大)	 〈平城京〉	 〈助宗窟〉  〈長岡京〉	
	b類 (小)	 〈平城京〉	 〈白山遺跡〉  〈長岡京〉	 〈花坂島橋遺跡〉  〈平城旧京〉
細 型		 〈白土地遺跡〉  〈花坂島橋遺跡〉  〈長岡京〉		

第Ⅱ部 2 長頸瓶(壺G)の用途のなぞ



つぼー
『壺G』について

奈良時代中頃から平安時代初頭にかけての約100年しか作られなかった短命の壺です。平城京の発掘調査で発見され、命名された長頸壺(ちょうけいこ)の一種です。

その用途は、堅魚(かつお)の煮汁(にじる)容器説・軍隊水筒説・花瓶(けびょう)(仏具)説等ありますが、まだ不明です。しかし畿内(きない)と東海・関東地方から集中して発見されることから、当時の政治動向に密接に関わっている壺と考えられています。

1. 堅魚(かつお)の煮汁の容器？
2. 東北へ派遣された兵士・官人の水筒？
3. 仏具の花瓶(けびょう)？

2022年までの千葉市埋蔵文化財センターの展示例

新版[古代の日本] ⑥ 近畿Ⅱ「都の焼物の特質とその変容」

(巽淳一郎) から



図3 漆運搬専用容器(左群)と堅魚煮汁運搬容器(右群)一平城京出土
(奈良国立文化財研究所提供)



志太郡衙資料館展示例

都城で発見される地方の焼物

以上の焼物類とは別に、税物を入れた容器として運ばれてきた焼物がある。油・漆・堅魚煎汁など、液状の物資は容器に入れて運搬する必要があり、主として須恵器の壺類が考えられる。中身はすでに失われほとんど痕跡をとどめないで、内容物を決めるのはむずかしい。現在、収納物資と産地が推定できるものとして、図3右群の長頸瓶がある。この種の壺は、八世紀末から九世紀中ごろまで流行し、都城のみならず、関東・北陸地方でも発見されている。しかし、この壺は政府が指定する須恵器の貢進国では生産されていない。産地が確認されているのは、駿河国(東笠子)と伊豆国(花坂島橋窯)の二国である。「主計式」の規定や調の荷札木簡によってこの二国が堅魚煎汁の貢進国であることが明らかであり、煎汁の容器として運ばれてきたことが想定できる。なお、中男作物として貢進される堅魚煎汁の荷札では一升を単位に荷造りされている。

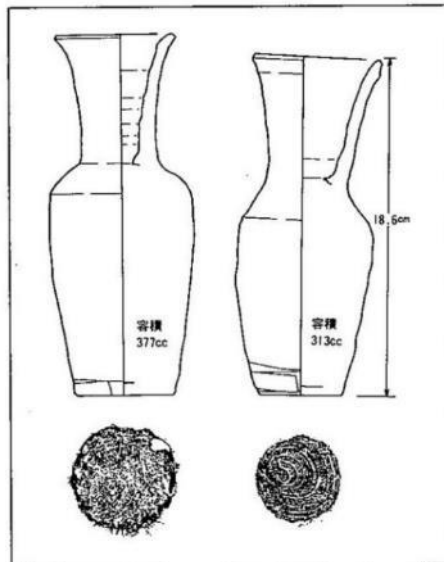
都の焼物の特質とその変容

沼津市博物館紀要 21

堅魚木簡に見られる堅魚などの実態について

瀬川 裕市郎

さて、平城宮跡の報告書で壺Gとされた瓶子について、その容量が4本ではほぼ1升到るとされる場合のあることや都城域からの出土の多いことなどから、これに堅魚煎汁を入れて都に貢納したとする考えもあるようである。現に昨年2月に行った壺Gを見る会の席上でも、この瓶子は堅魚汁を入れたものと断定的におっしゃる方もおられた。その席上でも壺Gの用途については、これといった結論めいたものは出なかったと思うが、中には慎重な方もおられて、さらに類例を増やすことや生産地、遺跡の中での出土位置など細かな検討も必要とするという意見もあったように思う。



藤井原遺跡(右)と御幸町遺跡の壺G

私はこの壺Gを見る会が開かれる以前から、必ずしも堅魚煎汁には液体を入れるという意味での容器は不必要ではないかと考えていた。それは漁師さんからうかがって、堅魚煎汁は煮詰めればゼリー状になるということを知っていたし、自分自身の行った実験でもそれはゼリー状となったので、液体にこだわることはないと感じていたからである。それと壺Gに堅魚煎汁を入れたと断定的におっしゃった方も、壺Gがそのための専用容器とは考えてはおられず、その用途の一つに堅魚煎汁があったということに違いないと思っていたので、そのへんはかなり幅をもって考えていた。

それでは堅魚煎汁を入れた容器は何かといえば、最も可能性のあるものとして、先に見た薩摩の例にならって木製の容器を考えておこうと思う。以前は竹筒や藁に包んでも輸送できるなどと考えたが、明治時代のこととはいえ、実際に薩摩では藩への貢納にあたって、樽や桶を使っていた。

「桓武朝の新流通構造：壺Gの生産と流通」

山中章 1997 『古代文化』第49巻11号

長頸壺Gは東国からの衛士の必需品（水筒）として長岡京へ、一方で東国から徴発された兵士の携帯用水筒として東北へ、また、中央からの命令を伝える官人の携帯品として各国府へ、持ち込まれたのではなかろうか。長頸壺Gは、国府でも、城柵でも、そして長岡京でも、中心施設からは出土していない。つまり、皇族や高級官僚の用いる高級品ではなかった。



第3図 壺G出土地分布図（地域境界は都道府県境）

国立歴史民俗博物館平成19年度企画展示「長岡京遷都－桓武と激動の時代」から



壺G 多賀城市教育委員会蔵 多賀城跡出土

す え き ち ょ う け い こ
須恵器長頸壺。長岡京から集中的に出土する特異な製品。伊豆国三島に所在する はなざか 花坂 しまばしよう 島橋窯及び駿河国藤枝の すけむねよう 助宗窯で生産されたことが知られる。ほかに武蔵国鳩山窯 ほとやまよう での生産の可能性も高く、東国一円で使用されていた。また東北の城柵遺跡からも量的には少ないが発見例が知られる。桓武朝における東北遠征の軍事行動にともなって、東国での使用例が参考にされて利用されるようになったものか。若干の型式変化を経て9世紀前半まで使用される。



かくちしあつど
つぼじー
各地出土の壺G

佐倉市教育委員会蔵
酒々井町教育委員会蔵

平成19年度 企画展示

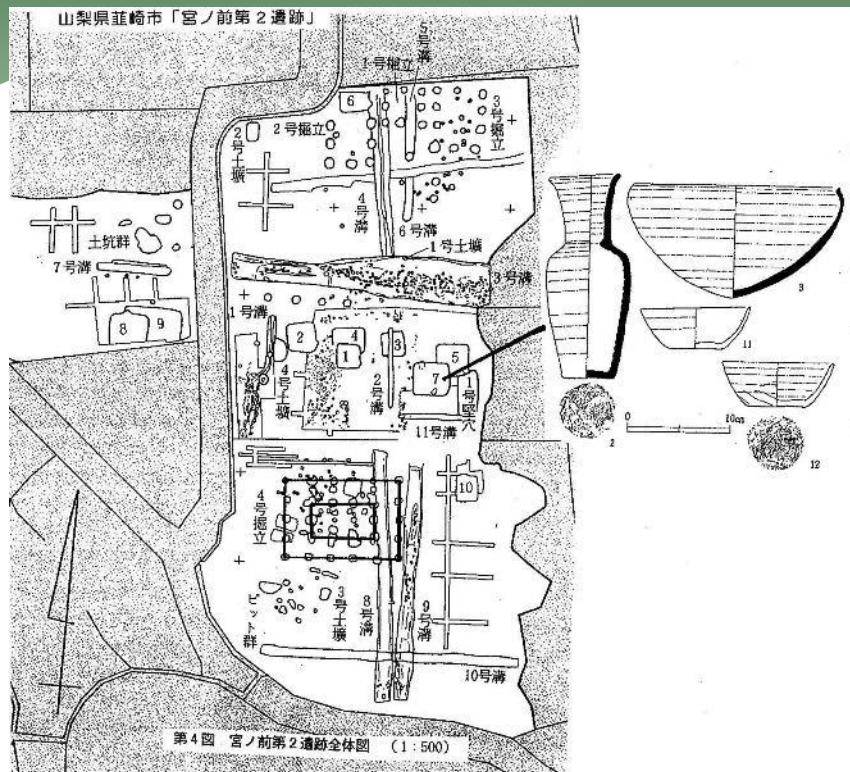
長岡京遷都

— 桓武と激動の時代 —

会期:平成19年10月10日(水)~12月2日(日) 人間文化研究機構 国立歴史民俗博物館

第Ⅱ部 2 長頸瓶(壺G)の用途

3-1 仏具の花瓶説 (1998 佐野)



1. 観音像の持つ古代花瓶の形状と須恵器壺の変遷が関連する
⇒仏の手を離れ、花活けの花瓶となった
2. 出土遺跡の性格 = 集落内の「寺」やお堂



「集落内の仏堂」(粉河寺縁起絵巻)



観音像の持つ花瓶 道明寺(大阪)



海住山寺(京都)



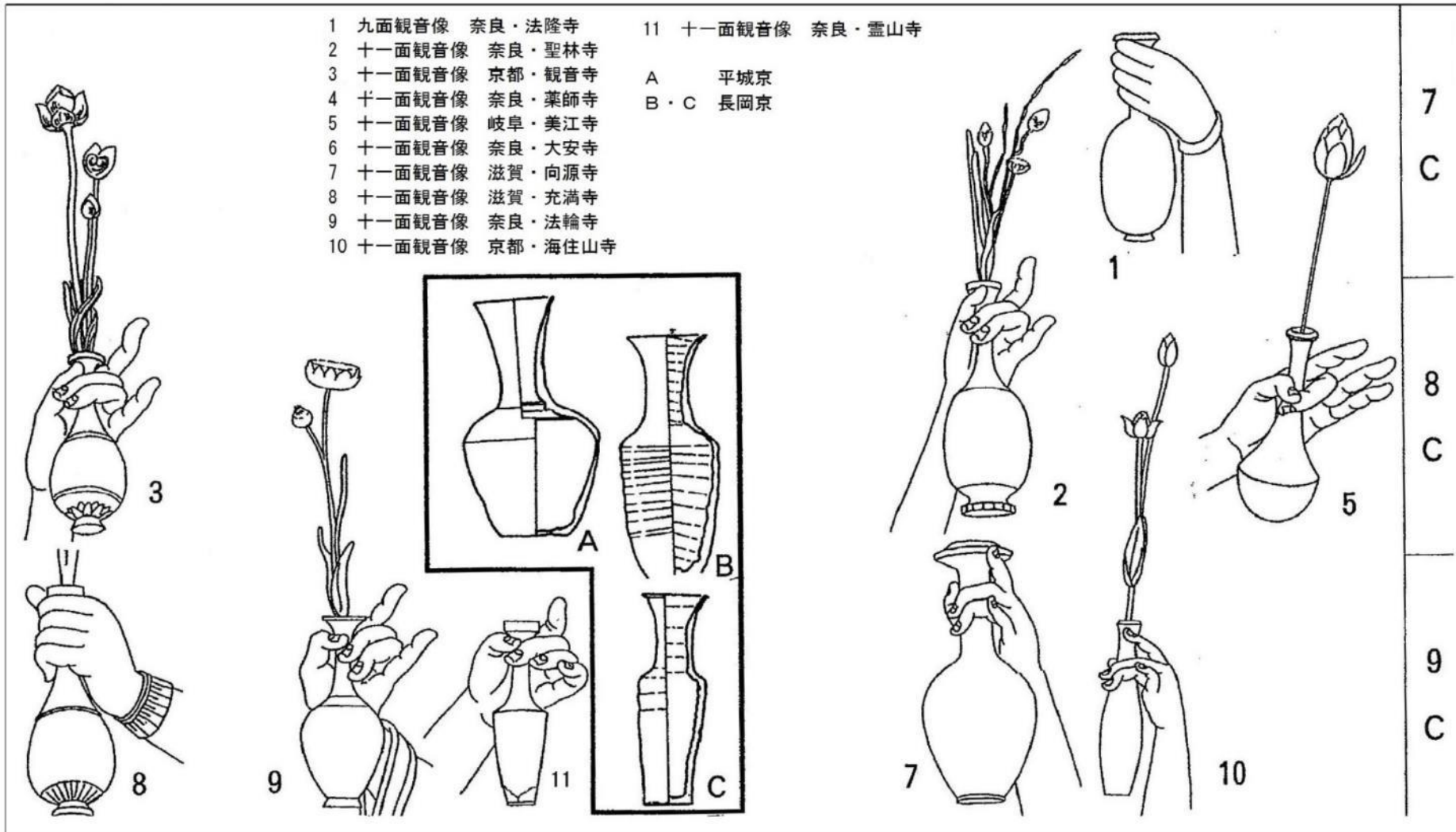
靈山寺(奈良)

第Ⅱ部 2 長頸瓶(壺G)の用途 3-2 観音像の持つ古代花瓶の形状と須恵器壺の変遷

仏像の持つ花瓶と壺G

(「古代花瓶の変遷」佐野五十三氏作図を一部改編)

- | | |
|-------------------|------------------|
| 1 九面観音像 奈良・法隆寺 | 11 十一面観音像 奈良・霊山寺 |
| 2 十一面観音像 奈良・聖林寺 | A 平城京 |
| 3 十一面観音像 京都・観音寺 | B・C 長岡京 |
| 4 十一面観音像 奈良・薬師寺 | |
| 5 十一面観音像 岐阜・美江寺 | |
| 6 十一面観音像 奈良・大安寺 | |
| 7 十一面観音像 滋賀・向源寺 | |
| 8 十一面観音像 滋賀・充滿寺 | |
| 9 十一面観音像 奈良・法輪寺 | |
| 10 十一面観音像 京都・海住山寺 | |

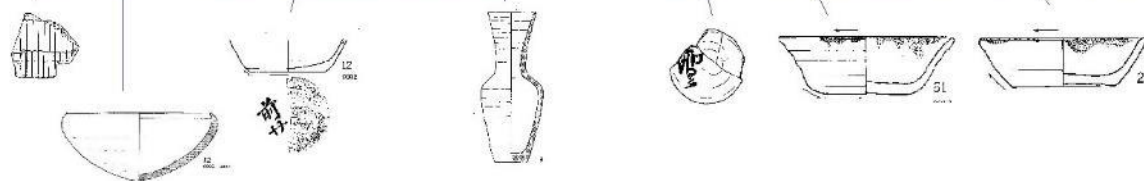


第Ⅱ部 3-1 長頸瓶(壺G)出土の遺跡－村上込の内遺跡の様相

村上込の内遺跡のジオラマ (国立歴史民俗博物館の展示に加筆)

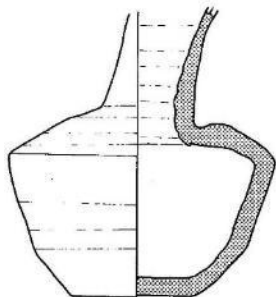
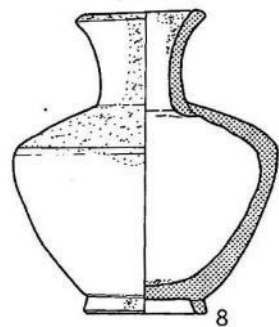
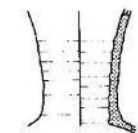
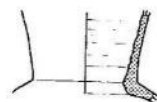
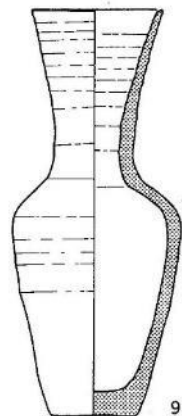
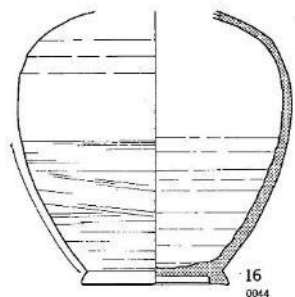


遺跡から出土した仏教関連遺物と「壺G」

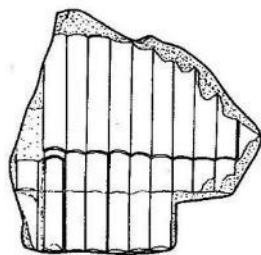


第Ⅱ部 3-2 村上込の内遺跡の仏教関連遺物

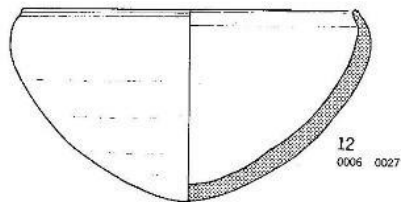
須恵器壺



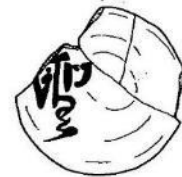
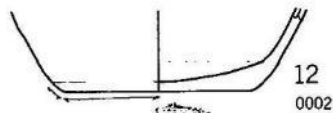
瓦塔



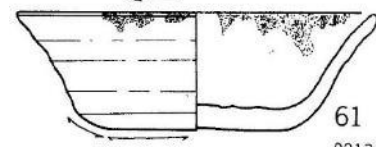
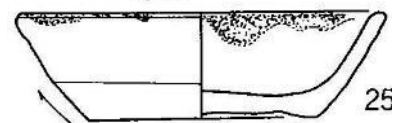
仏鉢(鉄鉢形土器)



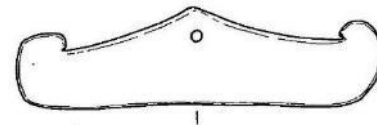
墨書土器



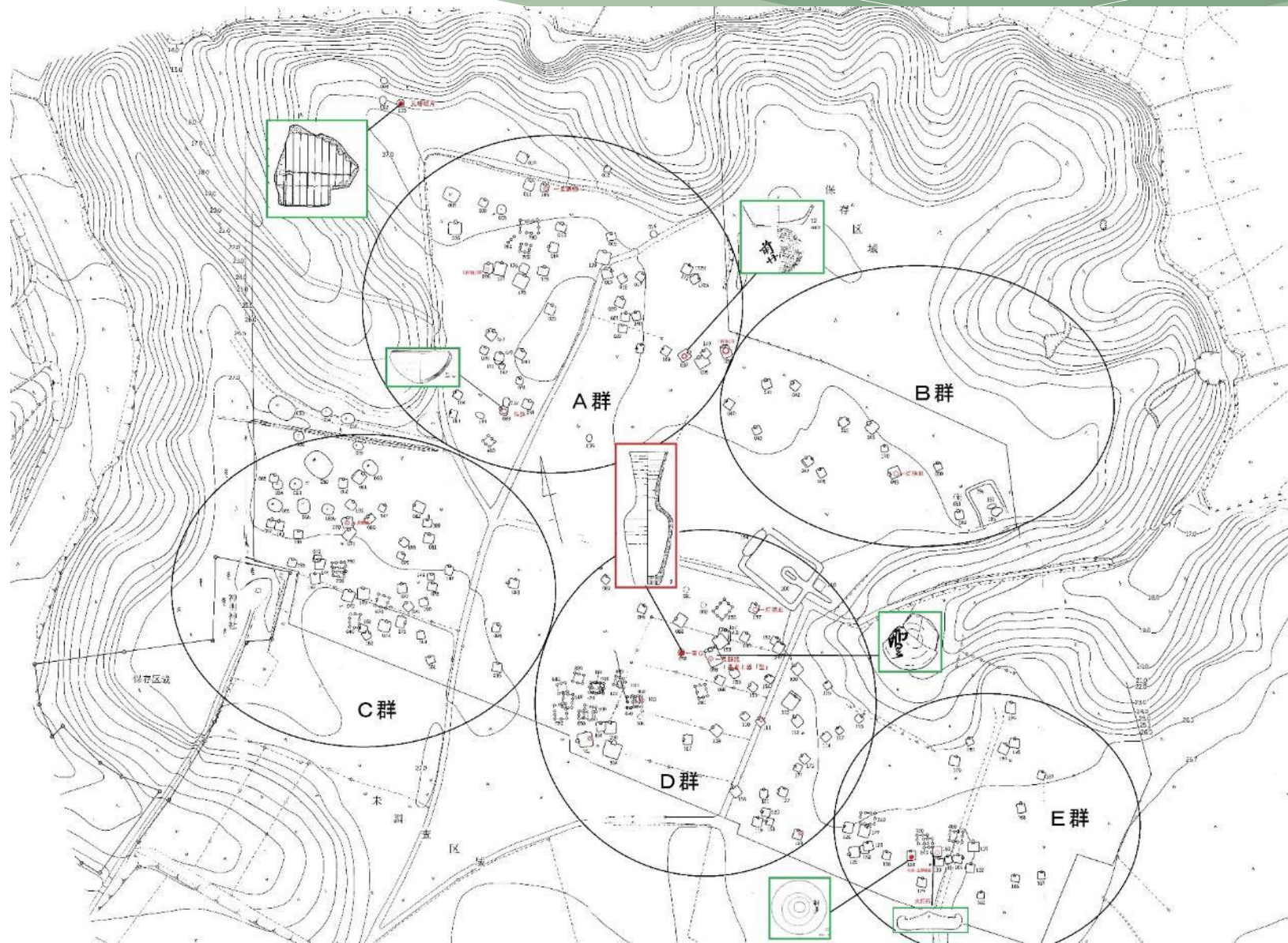
燈明具



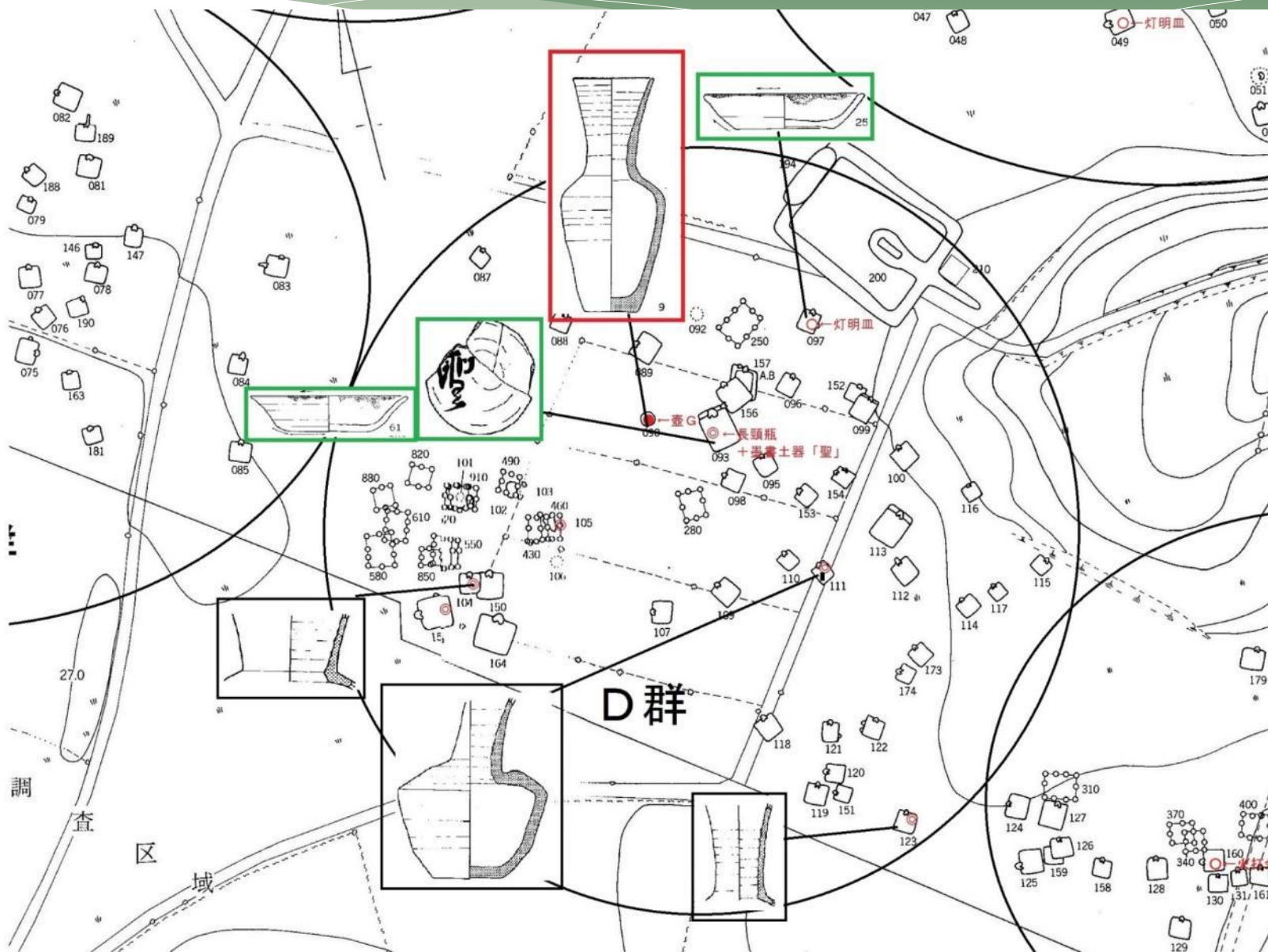
火打鉄(ひうちがね)



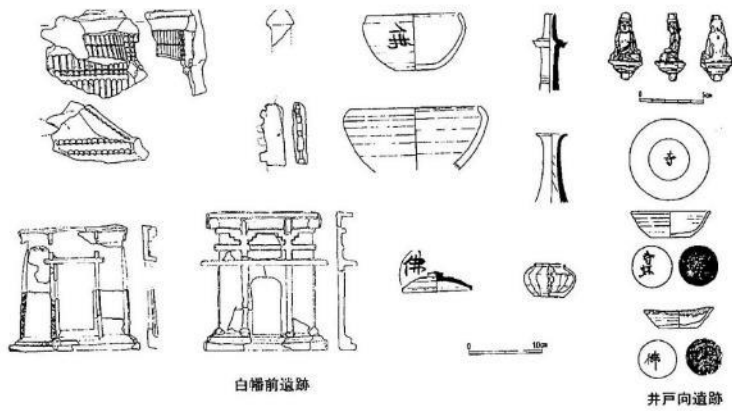
第Ⅱ部 3-3 村上込の内遺跡の仏教関連遺物の出土状況



第Ⅱ部 3-4 村上込の内遺跡の「壺G」出土のD群の様相

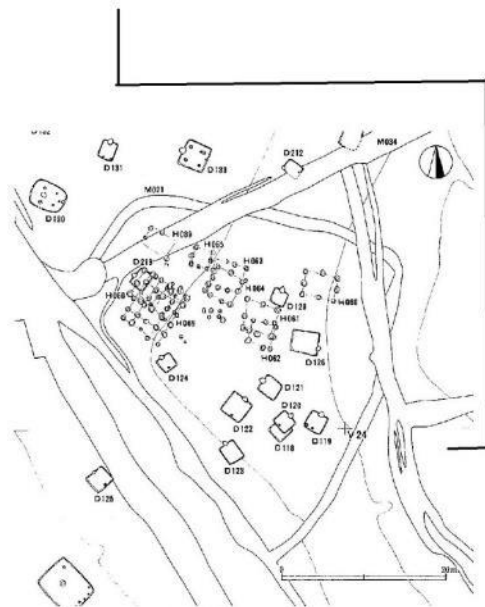


第Ⅱ部 4 長頸瓶(壺G)出土の遺跡－萱田遺跡群

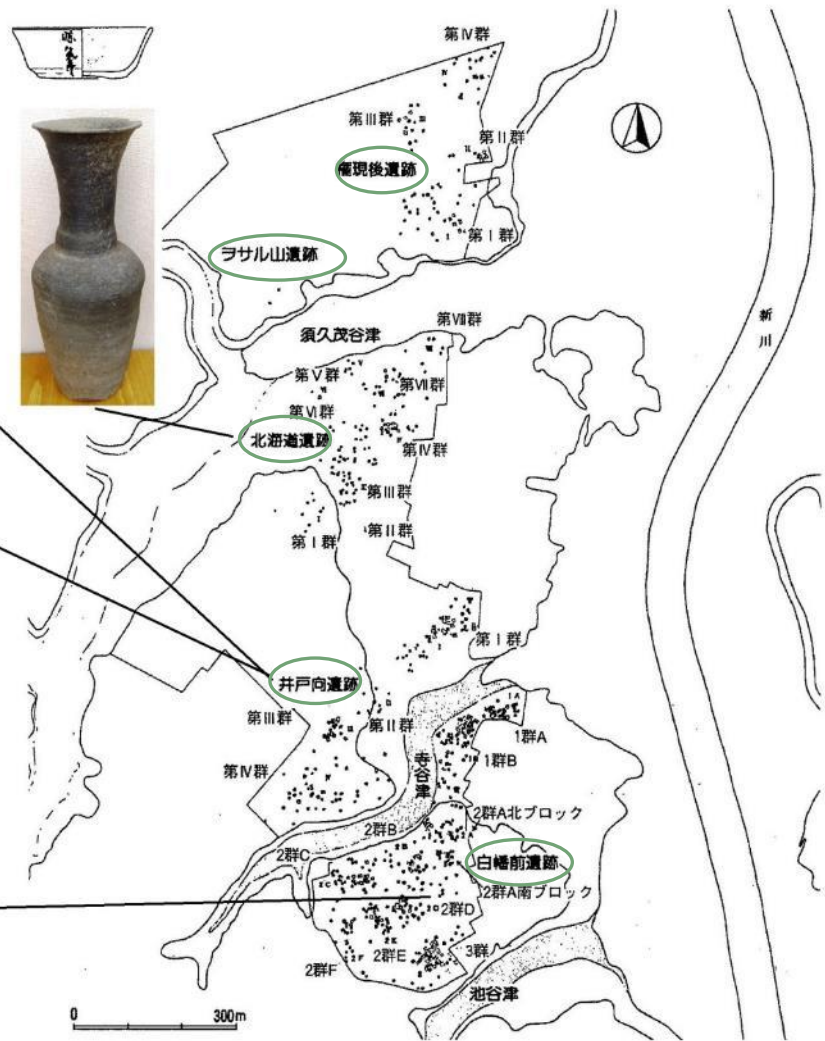


白幡前遺跡

萱田遺跡群出土の仏教関連遺物



白幡前遺跡 2群A南ブロック

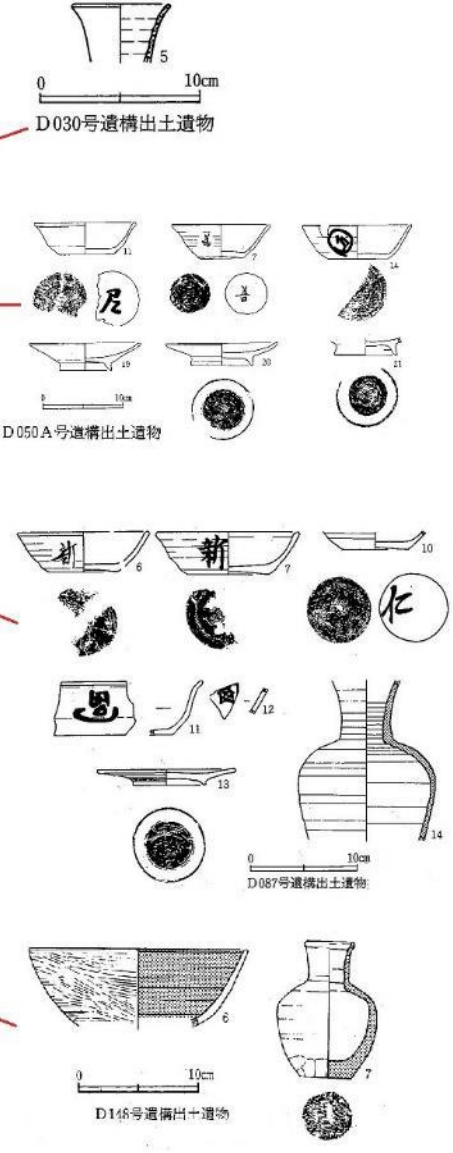
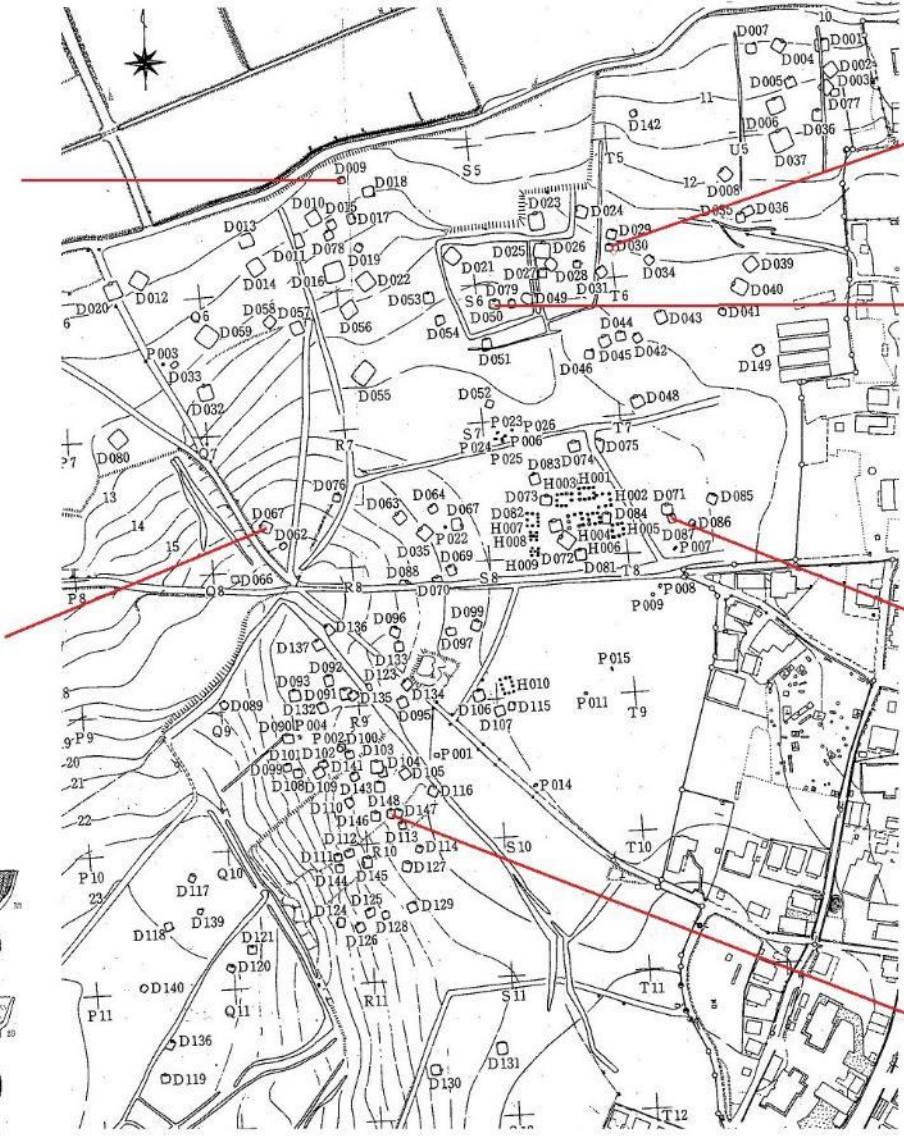
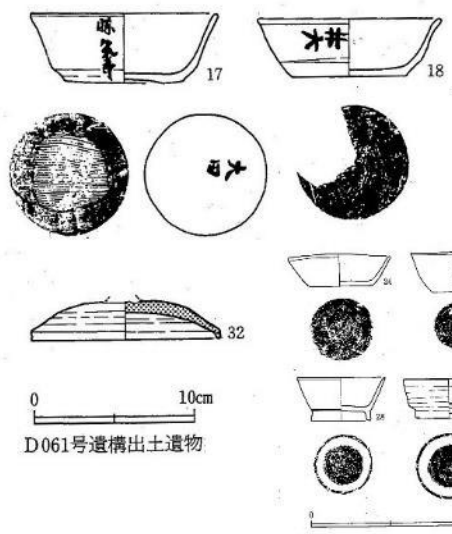
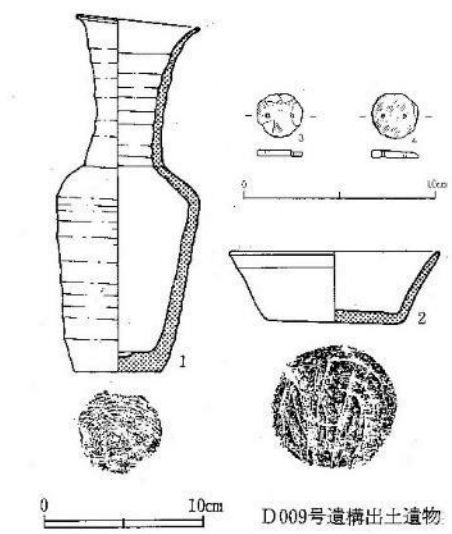


萱田遺跡群の遺跡と単位集団の配置

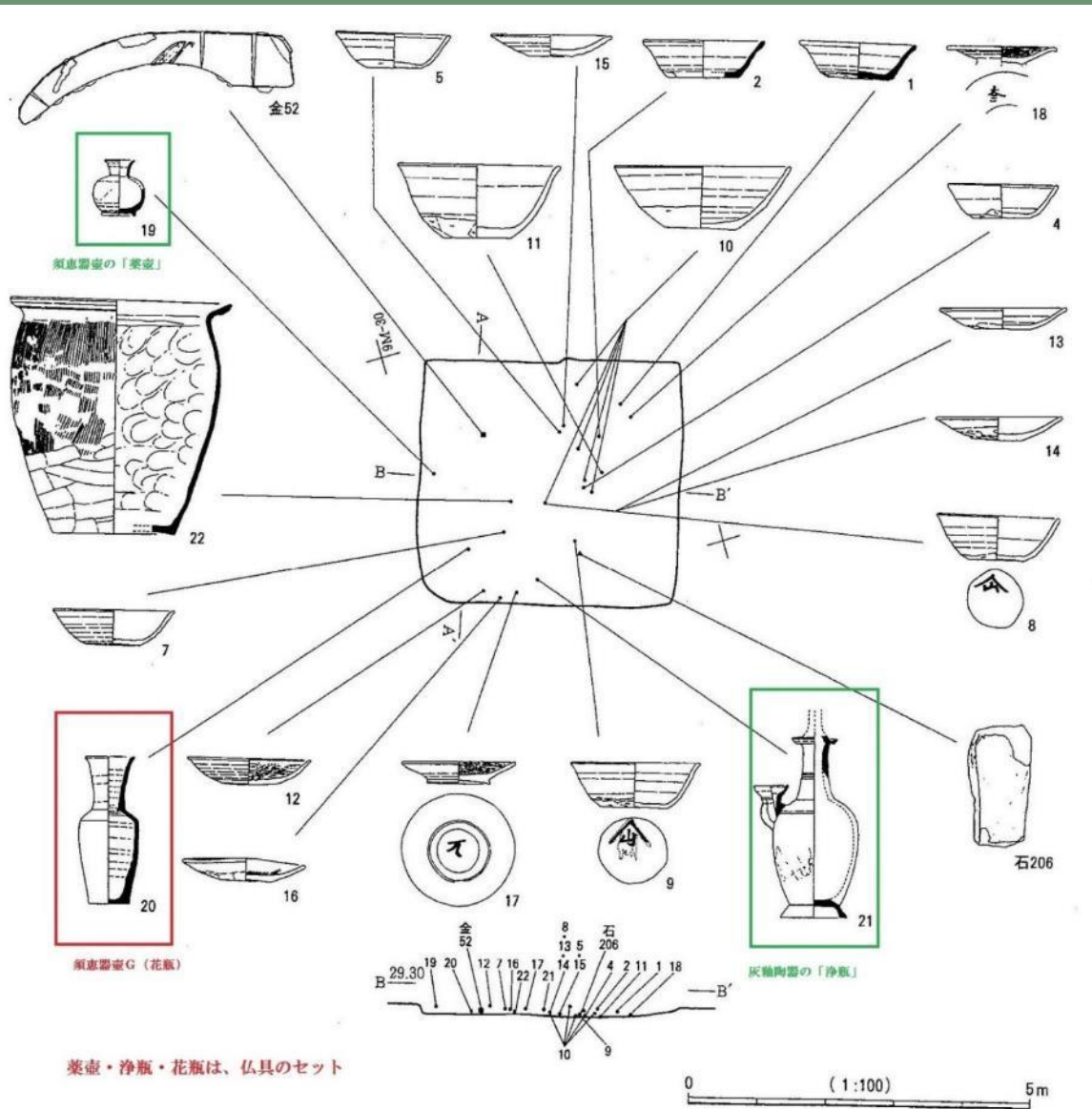


第Ⅱ部 4-2 長頸瓶(壺C)出土の遺跡－北海道遺跡の様相

北海道遺跡遺構地図と仏教関連遺物



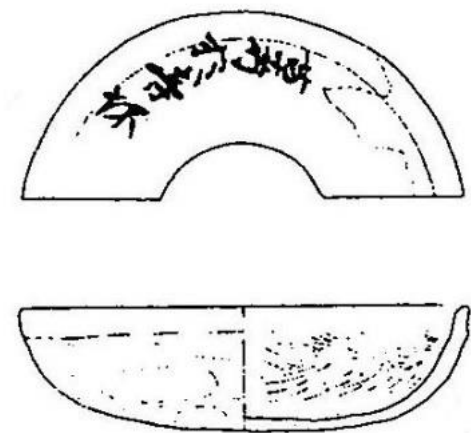
第Ⅱ部 5-1 長頸瓶(壺G)出土の市外の遺跡－草刈遺跡(千葉市)の様相



草刈遺跡(千葉市千原台)の出土遺物

←住居跡の「壺G」との共伴例
(茶壺・浄瓶・花瓶の仏具セット)

↓「草刈於寺坏」銘の土師器坏

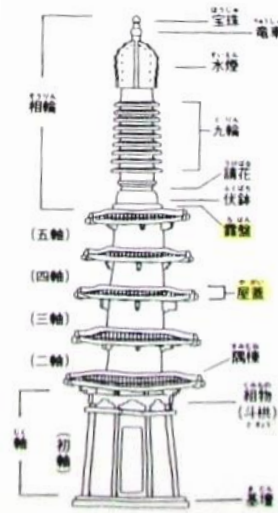


第92図 K370住居

第Ⅱ部 5-2 長頸瓶(壺G)出土の市外の遺跡－谷津貝塚(習志野市)の様相



谷津貝塚 2014.1.24展示会にて

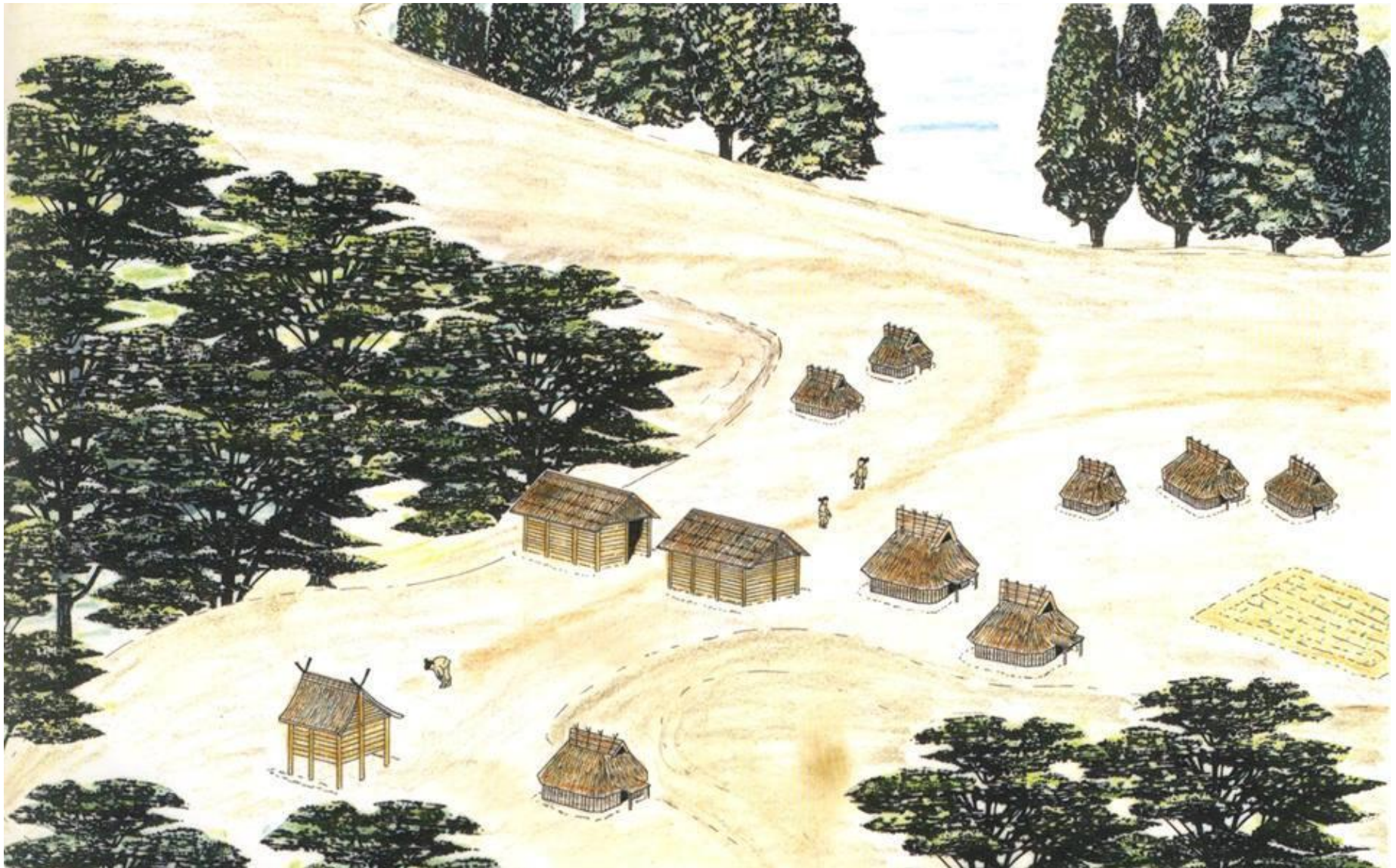


部位名称図 (駒宮・重四1994より)
(例) 泰山遺跡瓦塔



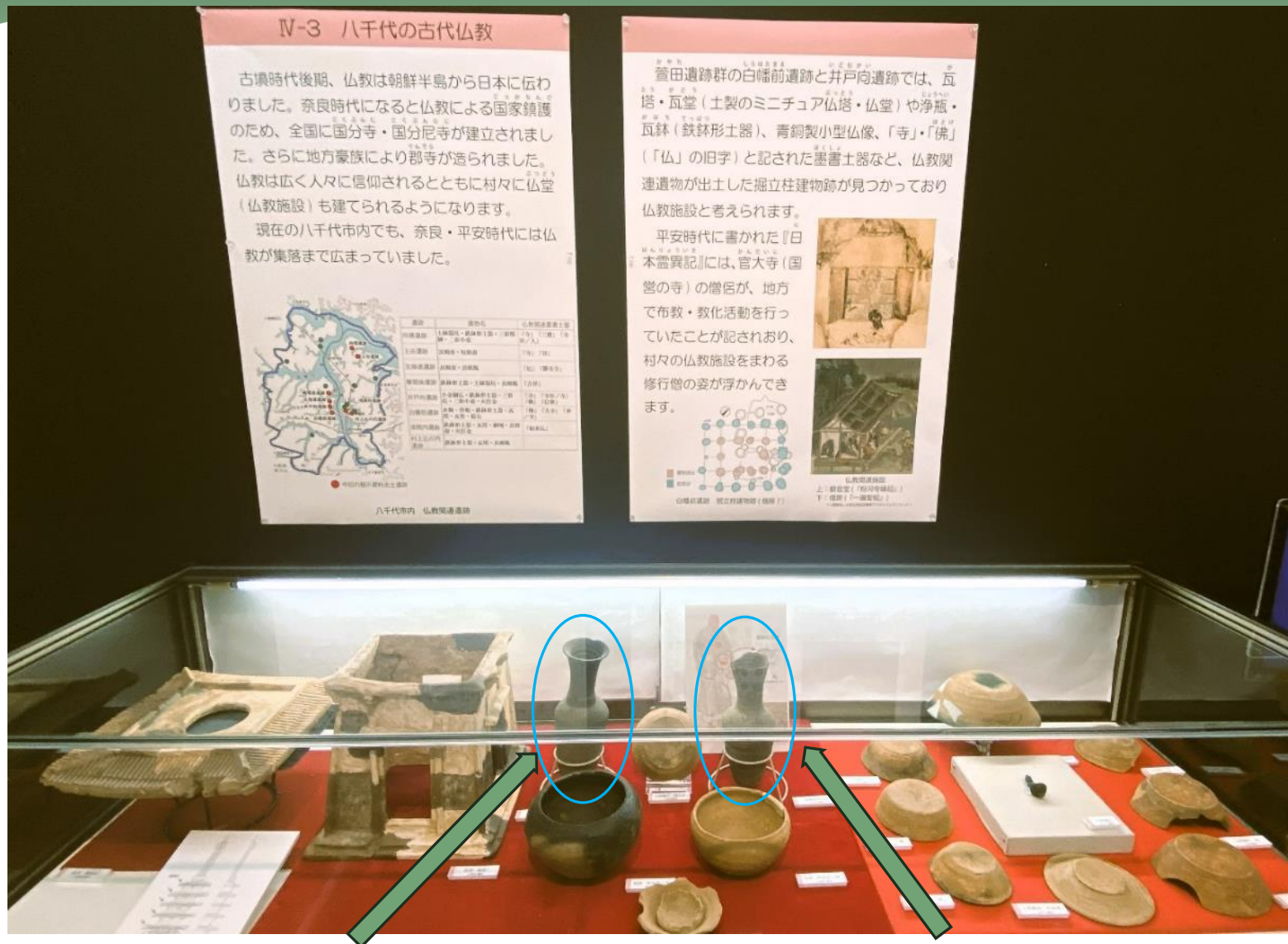
第Ⅱ部 6 長頸瓶(壺G)出土の遺跡の様相

「壺G」が2個出土した 白井屋敷跡遺跡 (佐倉市) の平安時代推定復元図 (画・林田利之)



第Ⅱ部 7-1 最新の長頸瓶(壺G)花瓶説の展示例

2023.10~12「八千代の古代仏教」

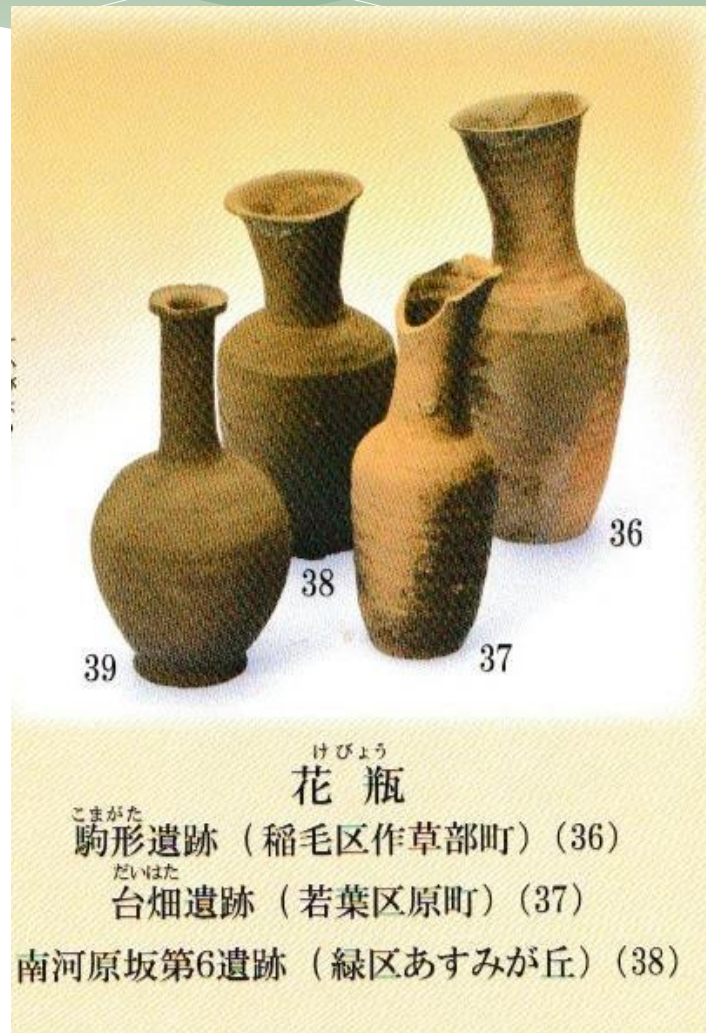
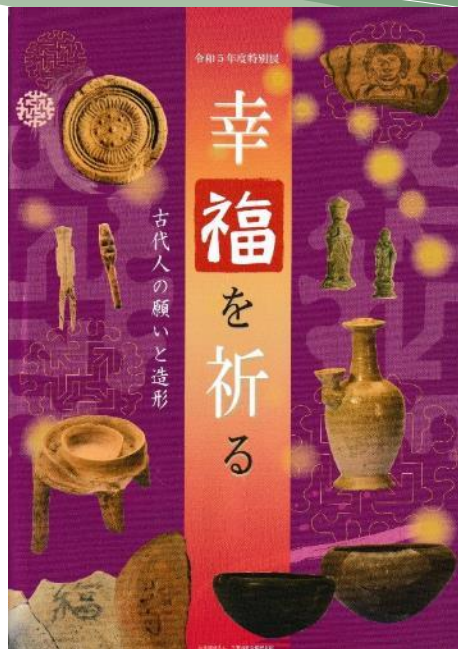


長頸瓶(北海道遺跡)

長頸瓶(村上込の内遺跡)

2023年10~12月巡回展「流山新市街地地区の遺跡展」(主催:千葉県教育振興財団)での八千代市立郷土博物館での展示

第Ⅱ部 7-2 最新の長頸瓶(壺G)花瓶説の展示例 2023.11~2024.3「幸福を祈る」展



2023年11月~2024年3月特別展「幸福を祈る-古代人の願いと造形」
(主催:千葉市教育振興財団)での展示と図録から

第Ⅱ部 長頸瓶(壺G)についてのまとめ



1. 壺Gは、密栓しづらい口の形、内容量、器の重さなどから、運搬用容器には適さない。
2. 観音像の持つ花瓶と須恵器壺の変遷の中で、壺Gの形が古代花瓶の形態に類似する。
3. 壺Gの出土遺跡からは、仏教に関連する遺物(「寺」「仏」などの墨書土器・浄瓶・香炉・灯明皿・瓦塔・仏鉢・火打金・三彩壺・小仏像など)も検出されている。
4. 8世紀後半～9世紀は、東国開発と民衆レベルの仏教の急激な拡大の時期で、壺Gの分布に一致する。

以上から、壺Gは仏に供える花瓶である。

「みほとけに花一輪」

ご清聴ありがとうございました